

## ◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

へいせいちしんかん  
平成知新館1F-6(漆工)に展示されている「化粧道具」について勉強してみよう。

## 男のコスメ? とびきり豪華な化粧道具

わたしたちが生きている今の日本では、お化粧という女性ができるものというイメージが強いですね。でも、人類の長い歴史をふりかえると、男性がきらびやかに化粧をすることはめずらしくなく、日本の古代・中世の高貴な男たちもしっかり化粧をし、着かざっていました。



図1 国宝 松椿蒔絵手箱 京都国立博物館蔵

むかしの日本のお化粧では、まず、顔を白粉で真っ白く塗りました。白粉の原料は、鉛や水銀でしたから、お肌にはあまりよくなさそうですね。

それから、生まれつきの眉毛は、毛抜きを使って抜いてしまい、黛で眉を描きました。そうすることを眉を作るといいました。眉を抜く風習は日本固有といわれ、ほかの民族には見られないそうです。黛は、松ヤニなどを燃やしてできた真っ黒な煤と、ツユクサや金箔をゴマ油で練りあわせ、地中に寝かしたものでした。

真っ黒といえば、お歯黒もあります。鉄漿とも書き、同じ字で鉄漿とも読みます。鉄漿は、米の研ぎ汁などを腐らせて作るお酢に、鉄くずや錆びた釘、針などを入れて沸かし、そこにヌルデという木に虫が作る瘤を粉にして加えた、黒いインクです。この液体で歯の表面を染めるのですが、とてもまずくて強烈に臭ったそうです。そこまでして歯を染めたのは、白い歯は、骨の先が見えているようで生々しいので、黒く塗って隠そうという考えからだったようです。

白、黒の次は、赤です。頬と唇に紅をさしました。これは今のお化粧と同じですね。といっても、日本の伝統的なお化粧では、上唇は白粉で塗りこめて下唇だけに紅を引きます。

今のように目のまわりにアイシャドウをのせたりアイラインを引いたり、つけまつげをしたりはしなかったので、真っ白な顔面に潤んだ瞳がぽっかりと切り開かれたような感じだったはずですよ。能面をおもい浮かべるといいかもしれません。うす暗い室内でもかなりの存在感があったことでしょう。

もうひとつ大事なお化粧に薫があります。香り、つまり、パフュームです。むかしはあまりお風呂に入らず、髪も洗わず、髪を米の研ぎ汁で整えたりしたので、臭いを隠す必要がありました。お香をたいて、煙を髪や衣服に燻らせて、香りをつけました。

さて、ここまでは前おきです。今日紹介するのは、そのようなお化粧の道具をまとめて入れた箱です（図1）。阿須賀神社に伝わりました。世界遺産にも登録されている和歌山県の熊野速玉大社にかつて付属した神社です。熊野の神々の多くは男神です。古い記録によると、この箱は、明徳元年（1390）に将軍、足利義満が、天皇や上皇と一緒に、熊野の神々のために装束や調度品（神宝といいます）を捧げたときの13合の手箱のひとつと考えられています。神々が人と同じ生活をすると考え、自分たちが使う道具と同じものを最高級の品質でしつらえて社に納めました。つまり、この化粧道具は、当時の位の高い人たちが使った化粧道具と同じものであり、できるかぎり豪華に作られたはずなのです。

金銀にかがやく手箱の中を見てみましょう（図1）。ふたを開けると、箱のふちに二重のトレーがのせてあります。トレーや箱の中には、金で文様を描いた銀製の薫物箱（お香を入れる円形の小箱）、白粉箱（白粉を入れる正方形の小箱）、歯黒箱（お歯黒の材料を入れる長方形の小箱）、白い磁器の皿や菊の花の形をした銀製の皿（化粧パレット）、歯黒筆（歯を染めるのに使う鳥の羽でできた筆）、眉作（アイブローブラシ）、髪搔、耳搔、鉋、鑷、鏡、解き櫛、櫛払い（櫛の汚れを取る道具）などを納めており、ほかに目のつまった櫛29枚を納めた櫛箱（図2）もあります。



図2 国宝 松椿時絵櫛箱 京都国立博物館蔵

手箱と櫛箱には、漆を塗った上に金粉や銀粉をふんだんに使って、松と椿が描かれています。中に入っている金属製の化粧道具も同じ文様で統一されています。松も椿も一年中、緑で枯れることがなく、長生きの願いが込められた文様です。

華やかでおめでたく、眩いばかりのコスメ・グッズですね。ぜひ展示会場で実物を眺めてみてください。

（教育室 永島 明子）